

医学の解剖

私は前項迄に、医学の誤謬を大体かいたつもりであるが、尚進んで之から鋭いメスを入れて、徹底的に解剖してみよう。と言っても別段医学を誹謗する考へは毫末もない。只誤りは誤りとして、ありのまま指摘するまでの事であるから、虚心坦懷になつて読みたいのである。それは先ず事実によつて、説明してみる方が早かろう。先ず何よりも医師が患者から、病氣の説明を求められた場合、断定的な答へはしない。甚だ曖昧模糊御座なりのである。例えば、患者に対する言葉であるが、何の病氣に就いても言

い切る事が出来ない。貴方の病氣は治ると思う。治る訳である。医学上そういう事になっている。此療法が効果ありとされている。此療法以外方法はない。養生次第で治らない事はない。貴方の病は万人に一人しかないなどというかと思えば、貴方は入院しなければいけない、と言はれるので患者は「入院すれば治りますか」と訊くと、「それは請合へない」というように、実に撞著的言葉である。又予想と実際と外れる事の、如何に多いかも医家は知っているであらう。

そうして、最初診察の場合、型の如く打診、聴診、呼吸計、体温計、レントゲン写真、血沈測定、注射反応、顕微鏡検査等々、機械的種々な方法を行うが、医学が真に科学的でありとすれば、それだけで病気は適確に判る筈である。処が両親や兄弟等の死因から、曾父母、曾々父母に迄及ぶのは勿論、本人に対しても、病歴、既応症等微に入り細に涉って質問するのである。之等も万全を期す上からに違いないが、実をいうと余りにも科学性が乏しいと言へよう。処がそうまでしても予想通りに治らないのは、全く診断が適確でないか、又は治療法が間違っているか、或は両

方かであろう。事実本当に治るものは恐らく百人中十人も難しいかも知れない。何となれば仮に治ったようでも、それは一時的であって安心は出来ない。殆んどは再発するか、又は他の病氣となつて現はれるかで、本当に根治するものは、果して幾人あるであろうか疑問と言えよう。此事実は私が言う迄もない。医師諸君もよく知っている筈である。此例として主治医という言葉があるが、若し本当に治るものなら、それで済んで了うから主治医などの必要はなくなる訳である。

右によつても判る如く、若し病氣が医学で本当に治るとしたら、段々病人は減り、医師の失業者が出来、病院は閑散となり、経営も困難となるので、売物が続出しなければならぬ筈であるのに、事實は凡そ反対である。何よりも結核だけにみても、療養所が足りない。ベットが足りないと言つて、年々悲鳴を上げている現状である。政府が発表した結核に関する費額は、官民合せてザット一ケ年一千億に上るといふのであるから、実に驚くべき数字ではないか。之等によつてみても、現代医学の何処かに、一大欠陥がなくはならない筈であるに拘はらず、それに氣が付か

ないというのは不思議である。というのは全く唯物科学に捉はれ、他を顧みないからであろう。

そうして、診断に就いて其科学性の有無をかいてみるが、之にも大いに疑点がある。例えば一人の患者を、数人の医師が診断を下す場合殆んど区々である。というのは茲にも科学性が乏しいからだと言えよう。何となれば若し一定の科学的規準がありとすれば、其様な事はあり得る訳があるまい。若し医学が果して効果あるものとすれば、何よりも医師の家族は一般人よりも病気が少なく、健康であり、医師自身も長寿を保たなければならぬ筈である。処

が事實は一般人と同様処か、反って不健康者が多いという話で、これは大抵の人は知っているであらう。而も医師の家族である以上、手遅れなどありよう訳がないのみか、治療法も最善を尽す事は勿論であるからどう考へても割り切れない話だ。そればかりではない、医師の家族が病氣の場合、その父であり、夫である医師が、直接診療すべきが常識であるに拘はらず、友人とか又は他の医師に診せるのはどうした事か。之も不思議である。本当から言えば、自分の家族としたら心配で、他人に委せる事など出来ない訳である。それに就いてよく斯ういう事も聞く。自分の家族と

なると、どうも迷いが出て診断がつけ難いというのである。としたら全く診断に科学性がないからで、つまり推定臆測が多分に手伝うからであろう。

私は以前、某博士の述懐談を聞いた事がある。それは仲々適確に病氣は判るものではない。何よりも大病院で解剖の結果、診断と異う数は、一寸口へは出せない程多いといった事や、治ると思って施した治療が、予期通りにゆかない処か、反って悪化したり、果ては生命迄も危くなる事がよくあるので、斯ういう場合どう説明したら、患者も其家族も納得するかを考へ、夜も寝られない事さへ屢々あ

り、之が一番吾々の悩みであるというので、私も成程と思った事がある。

此様に、医学が大いに進歩したと言ひ乍ら診断と結果が、実際と余りに喰違うので、医師によつては、自分自身医療を余り信用せず精神的に治そうとする人もよくあり、老練の医師程そういう傾向がある。彼の有名な故入沢達吉博士の辞世に『効かぬとは思えど之も義理なれば、人に服ませし薬吾服む』という歌は有名な話である。又私は時々昵懇の医博であるが、自身及び家族が罹病の場合、自分の手で治らないと私の処へよく来るが、直に治してやるので

喜んでゐる。以前有名な某大学教授の医博であつたが、自身の痼疾である神経痛も令嬢の肺患も、私が短期間で治してやった処、某夫人は大いに感激して、医師を廃め、本療法に転向させるべく極力勧めたが地位や名誉、経済上などの關係から決心が付き兼ね、今以て其儘になつてゐる人もある。今一つ斯ういう面白い事があつた、十数年前或大実業家の夫人で、顔面神経麻痺の為、二目と見られない醜い顔となつたのを頼まれて往つた事がある。其時私は何にも手当をしてはいけなと注意した処、家族の者が余り五月蠅いので、某大病院へ診察だけに行つたが其際懇意である

其病院の医長である有名な某博士に面会した処、その医博
曰く“その病氣は二年も放っておけば自然に治るよ。だか
ら電気なんかかけてはいけないよ。此処の病院でも奨めや
しないか”と言はれたので『仰言る通り奨められました
が、私はお断りしました』と言うと、博士は『それはよか
った』という話を聞いたので、私は世の中には偉い医師も
あるものだと感じた事があった。その夫人は二ヶ月程で
全快したのである。

偕て、愈々医学の誤謬に就いて、解説に取りかかろう。